

佐久市埋蔵文化財調査報告第10集

長土呂遺跡群

HIJIRI HARA  
聖原遺跡 II

長野県佐久市長土呂聖原遺跡II発掘調査報告書

1992

佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター

佐久市埋蔵文化財調査報告第10集

長土呂遺跡群

HIJIRI HARA  
聖原遺跡 II

長野県佐久市長土呂聖原遺跡II発掘調査報告書

1992

佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター

# 例 言

1 本書は、佐久流通業務団地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2 調査委託者 佐久市開発公社

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地籍

長土呂遺跡群 聖原遺跡Ⅱ (NNHⅡ)

佐久市大字長土呂字長土呂隠し1-4

5 調査期間及び面積

平成元年3月27日～4月18日・1,870㎡

6 調査団の構成

事務局 佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 西沢 正巳

庶務係長 島山 俊彦

庶務係 飯沢 恵子 (臨時職員)、菊池 直美 (臨時職員)

調査係主任 高村 博文

調 査 係 三石 宗一、小山 岳夫、小林 眞寿、翠川 泰弘、  
助川 朋広、神部 妙子 (臨時職員)

調査団 団 長 黒岩 忠男 (佐久考古学会副会長)

調査指導者 白倉 盛男 (佐久考古学会副会長)

調査担当者 小林 眞寿

調査主任 竹原 学、助川 朋弘

調 査 員 井上 行雄

調査補助員 神部 妙子、小林 幸子、宮川百合子、和久井義雄

協 力 者 井出みずほ、上原 幸子、上原 学、江原 富子、木内 明美

(五十音順) 高地 正雄、小出ユミ子、田村 祐子、成沢 富子、花岡美津子  
星野 保彦、塚籠 滋子、塚籠みさと、森角せきよ、森川 宗治  
柳沢豊志子

7 本書は、小林眞寿が執筆・編集した。また、当遺跡の立地・環境については「聖原遺跡Ⅰ調査既報」(1990)・御代田町教育委員会「聖原Ⅱ遺跡」(1990)においてその詳細が記述されているため割愛した。

8 本書及び聖原遺跡Ⅱ出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

- 1 遺構の略称 H-住居址 F-掘立柱建物址 D-土坑 M-溝址 P-ピット
- 2 遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりである。
  - 1) 遺構→1/80 2) 遺物→1/1～1/4
- 3 押図中におけるスクリーントーンは下記の内容の表現である。  
遺構・・・地山断面→斜線 焼土→点 粘土→細点 柱痕→砂目極細 堀り方→砂目  
遺物・・・須恵器断面・黒色処理→点
- 4 遺構の海拔標高は、各遺構毎に統一し、水系標高として明記した。
- 5 押図中の略記号は次のとおりである。  
P→ピット S→石
- 6 写真図版中の番号は、押図番号と対応する。
- 7 各一覧表の数値については、不明は空白、推定値は（ ）で示した。
- 8 土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版 標準土色粘』に基づいて示した。

# 目 次

例言  
凡例  
目次

第I章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機	1
第2節 調査日誌	2
第II章 基本層序及び概要	3
第1節 基本層序	3
第2節 検出遺構・遺物の概要	3
第III章 遺構と遺物	6
第1節 竪穴住居址	6
第2節 堀立柱建物址	31
第3節 土 坑	33
第4節 溝 址	33
第IV章 調査まとめ	44
引用参考文献	49

図版

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 発掘調査に至る動機

聖原遺跡は佐久市の北部、浅間山南麓末端部の南西に放射状にのびる田切り地形に挟まれた緩傾斜面台地上に位置し、標高734～746mを測る。

当遺跡内では、昭和63年度に「上聖塚」、平成元年度に「聖原遺跡Ⅰ」・「聖原Ⅱ遺跡」(御代田町教育委員会調査分)、平成2年度には「聖原遺跡Ⅲ」等の調査が相次いで実施され、総計800棟に及ぶ竪穴式住居址等が検出されており、当遺跡が古代佐久平の中核的な遺跡の一つであったことが明らかになりつつある。

平成元年、当遺跡内において佐久市開発公社・佐久市土地開発公社・佐久市経済部商工観光課により佐久流通業務団地整備事業が計画されたため、3月22～3月23にかけて試堀調査を行った結果、約2000㎡を対象に記録保存を前提とした発掘調査を実施する必要が生じたため、佐久市教育委員会が佐久市開発公社より委託を受け、佐久市教育委員会から委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが調査を実施することとなった。



第1図 聖原遺跡Ⅱの位置 (1:50,000 国土地理院地形図による)

## 第2節 調査日誌

### 平成元年

- 3月14日 佐久市開発公社・佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センターによる現地協議を行う。
- 22日 試掘調査。
- 23日 試掘調査。
- 27日 重機による表土除去作業。機材の搬入・テント設置。食肉センター駐車場と水道使用の了解を取る。
- 28日 重機による表土除去作業継続。
- 29日 重機による表土除去作業継続。遺構検出作業と並行して住居址の掘り下げを開始する。
- 30日 重機による表土除去作業継続。住居址掘り下げ、M2号溝址掘り下げ。
- 31日 雨のため重機による表土除去作業を除き作業を中止する。表土除去作業は本日をもって終了。
- 4月1日 遺構掘り下げ。
- 2日 測量基準杭が設定されたため、遺構の掘り下げに並行して実測を開始する。  
(測量基準点は、X=32140,00 Y=1040,00 H=748,33)
- 3日 遺構掘り下げ、実測作業。
- 5
- 18日 本日を以て現場でのすべての調査が終了。機材を聖原遺跡Ⅰの現場に移動する。

平成二年 遺物の洗浄・図面修正作業に着手、これを終了させる。

平成三年 遺物整理、遺構図の製図等報告書作成に拘わる一切の作業を行い、原稿を執筆する。

## 第II章 基本層序及び概要

### 第1節 基本層序

第2図に聖原遺跡IIの基本層序を示した。

第I層—暗褐色～黒褐色 (10YR3/3～10YR2/3)。耕作土。

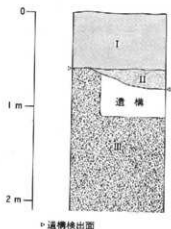
第II層—黒褐色 (10YR2/2)。φ7mm大バミス多含、砂粒少含。

第III層—浅黄橙色 (10YR8/4)。浅間第1軽石流層。

第II層については調査区の北東部、特にM1・2号溝址周辺部分に顕著に認められ、調査区全面を被覆しているものではない。

第1層—20～60cm、第2層—0～20cmの厚さを有し、相対的に調査区の北東に向かって厚く堆積している。

遺構の検出は、第3層上面で行った。



第2図聖原遺跡II基本層序模式図

### 第2節 検出遺構遺物の概要

#### 遺 構

竪穴住居址—9棟 掘立柱建物址—2棟 土坑—1基 溝址—2条

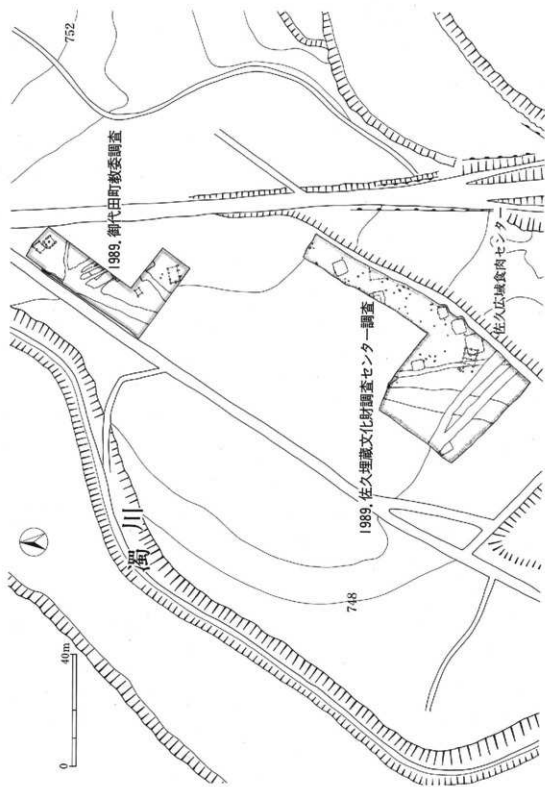
#### 遺 物

土 器 土師器—壺・甕・环・高环・碗 須恵器—壺・甕・环・环蓋

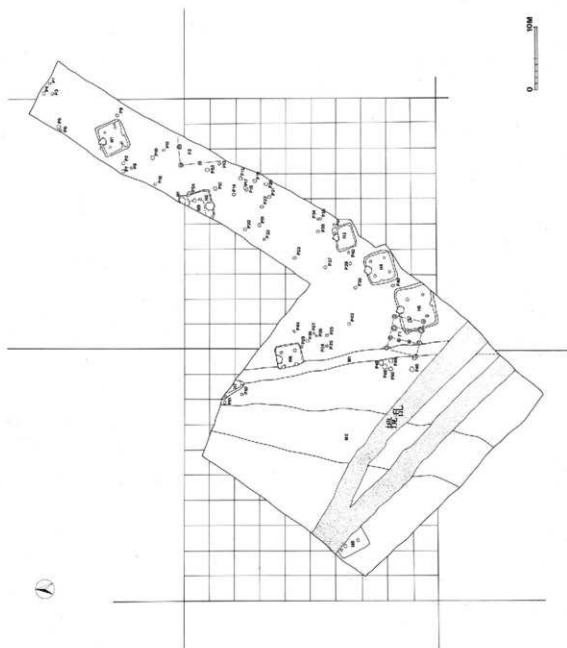
石 器 打製石斧・打製石鎌 石製品 石製模造品・こも石・砥石

鉄製品 刀子・鎌・鉄滓 種 子 骨片





第3図 聖原遺跡II発掘区設定図



第4図 聖原遺跡Ⅱ全体図

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

### 第1節 竪穴住居址

#### 1) H1号住居址

##### 遺構 (第5・6図、図版二)

本址は調査区東北端より西南に10mの位置に検出された。Pit47を切るほかは他遺構との重複関係はもたないものの、耕作による擾乱がカマド煙道部分を破壊している。

南北-4.4m、東西-5mの長方形プランを呈し、検出面からの壁高は平均36cmを測る。覆土は8層から成る自然堆積である。床面はロームを主体とする埋土により平坦に版築され、その上にロームと粘質土の混在土を敷設して堅く叩締られている。壁体は第三層をそのまま使用しているが、壁下に所謂「壁溝」を有している。Pitは均等位置に4基が検出され、深度40-50cmを測り、 $\phi$ 10cm大の柱痕が認められた。また、P3・P4の2基はそれぞれ西・東辺から直角にのびる溝により壁溝と連結される、所謂「間仕切」施設を有する。カマドと相対する南壁下中央部には出入口施設の可能性がある高い盛り込みが認められた。

カマドは、北壁中央に構築されており、袖の付け根は地山部分を僅かに削り残し基部とする他は粘土により構築され石等の芯材は認められないが、天井部には軽石を構築材として使用していたことが、本址床面に散乱していた軽石が火熱を受けていたことから想定される。

遺物は第6図に示したような出土状況を呈しており、その大半は、4層中に包含されていた。その状態はカマド及び周辺に位置していたものが埋没過程において放射状に拡散したものと考えられる。

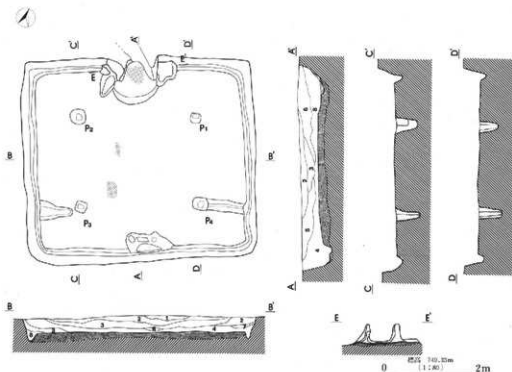
##### 遺物 (第7図・図版十一～十二)

須恵器・土師器が出土している。須恵器6点、土師器7点を図化した量が量的には土師器が大半を占めており、須恵器は少量である。

須恵器の器種には、無台・有台の坏蓋、鉢、甕、が認められる。坏のロクロからの切り離しはへらにより行われており、その後回転ないし手持のへら削り調整が加えられている。甕・壺の類は巻き上げないし輪積技法により成形されており、12・13には叩目、当具痕が認められる。

土師器の器種には坏・甕が認められる。坏は全て丸底を呈する非ロクロ成形、甕は8・9が所謂「武蔵型の甕」、10は内面口頸部と外面に横位のへらミガキ調整が加えられるもの、11は頭部下にへらケズリ調整の施される大形の球胴甕である。

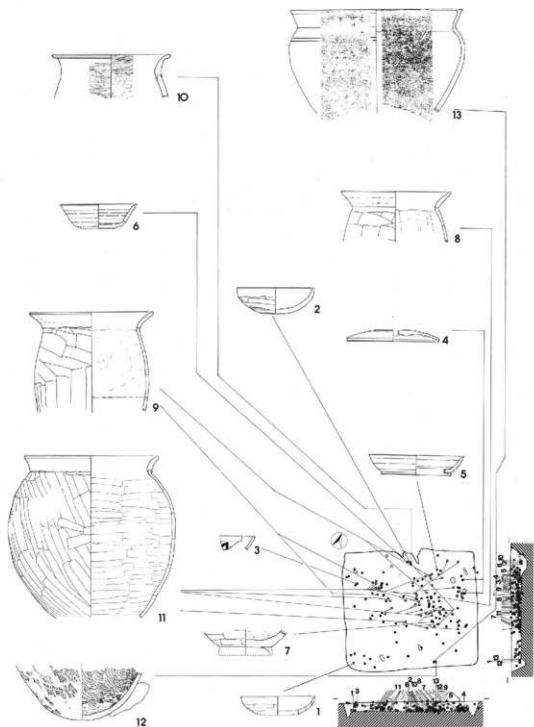
尚、3・7は混入遺物であり本址に伴うものではない。それ以外の10点の土器については、本址に伴うものとして捉えられよう。



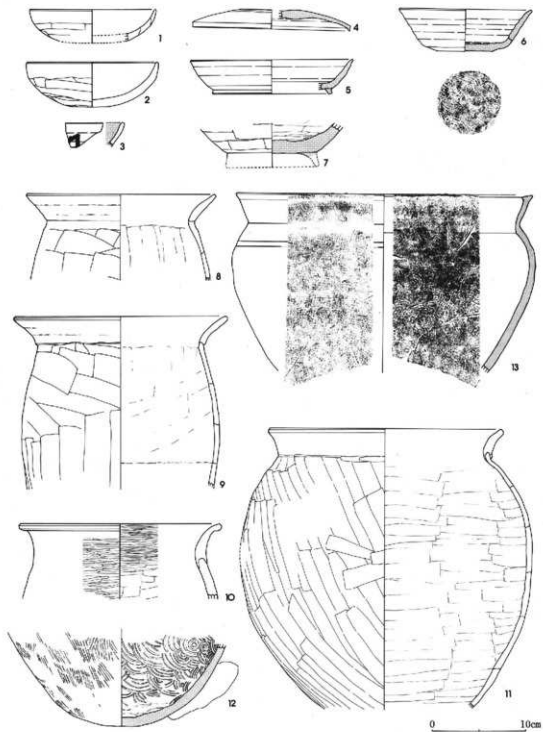
第5図 H1号住居址実測図

H1号住居址土層説明

- |  |  |
|--|--|
| <p>1 基本層序第Ⅲ層。<br/>         2 灰黄色土層 (10YR4/2)。<br/>         ローム粒子(10YR8/4)・21.5cm大パリスを多含する。<br/>         3 2層中におけるパリス含有率が低く、φ1.5cm大ローム粒(10YR7/6)を少含する。<br/>         4 黒褐色砂質土層 (10YR3/2)。<br/>         5 濃い黄褐色土層(10YR6/4)。<br/>         φ1-1.5cm大パリス・φ1cm大ローム粒(10YR8/4)・φ5mm大石粒を多含する。<br/>         6 3層中にカマド構築粘土(7.5YR5/4)・焼土を多含する。カマド遺出層。</p> | <p>7 ローム (10YR8/3) 2次堆積層。<br/>         灰黄色粒子 (10YR4/2) を少含する。<br/>         8 ローム (10YR7/6) 2次堆積層。<br/>         9 褐色粘質土 (10YR4/4)。カマド構築土。<br/>         φ1cm大ローム粒(10YR8/4)・φ1cm大石粒を少含する。<br/>         10 濃い赤褐色粘土(7.5YR5/4)。カマド構築土。<br/>         11 張り方人為堆土層。</p> |
|--|--|



第6图 H1号住居址遺物分布・接合關係図



第7图 H1号住居址出土器物实测图

## 2) H 2号住居址

### 遺構 (第8・9図、図版三)

本址はH 1号住居の南西12m、F 2号掘立柱建物址の西方4mの位置で検出された。調査区域外に遺構は広がっており、約1/2を対象に調査を実施した。Pit54・H 9号住居址を切って構築され、D 1号土坑により切られている。

推定で南北4m、東西4.8mの長方形プランを有していたものと思われる。検出面からの壁高は平均30mを測る。覆土は4層から成り、出土遺物の大半は1層中に含まれていた。床面は埋土をほとんどに用いずに、赤褐色粘土とロームの混在土により版築され平坦である。

床面上において2基のPitが検出されたが、本址の柱穴配置が判然としないためその性格は不明である。

本址は完掘できなかつたため、カマドについては、一切不明である。しかし、火熱を受けた軽石が住居中央や北側の覆土(1層)中より検出されており、北壁中央部分に存在するものと思われる。

### 遺物 (第10図、図版十二)

須恵器・土師器が出土している。須恵器5点、土師器7点、砥石2点を図化した。相対的に出土量は少なく、未図化遺物の大半は土師器の所謂「武蔵型の甕」片である。

須恵器の器種には無台・有台の坏が認められ、全て回転糸切りによりロクロから切り離されている。

土師器の器種には坏と甕が認められ、坏は全てのものに内面黒色処理が施されている。ロクロからの切り離しは、底部が残存しているものは例外なく回転糸切りである。これらのうち、1は外底とその周縁に、3は外底周縁に手持ちのヘラ削り調整が加えられている。また、4～6には墨書が認められるが、破片のため判読できない。12の甕は所謂「武蔵型の甕」の底部である。尚、桃ないし梅の種子が1点出土している。

## 3) H 9号住居址

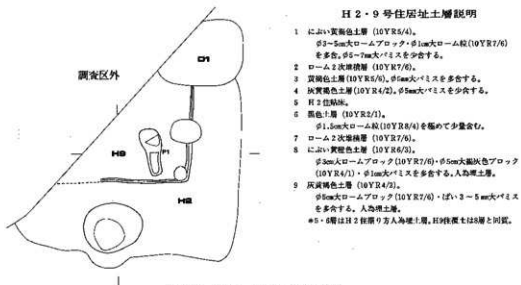
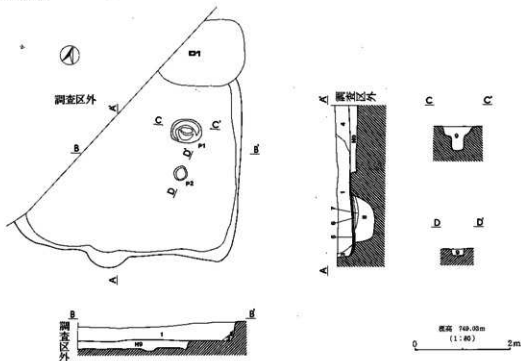
### 遺構 (第8・9図、図版三)

本址は、H 2号住居址床下より検出された。H 2号住居址のはば中央に位置するため、全容は不明であるがH 2号住居址構築時の破壊をかなり受けており、そのプランの一部とPit 1基が残存していたにすぎない。

### 遺物 (第10図、図版十三)

H 2号住居址床下(H 2号住居址堀り方及びH 9号住居址覆土)より出土した図化不可能な土器破片はH 2号住居址覆土より出土した13～15と同時期であり、この3点の土器は本来H 9号住

居址に包含されていたものと思われる。全て土師器であり、13は所謂「手ずくね」によるミニチュア土器。14は非ロクロ成形の丸底を呈する坏。15は外面ヘラ削り、内溝ヘラナデが施される長胴甕である。

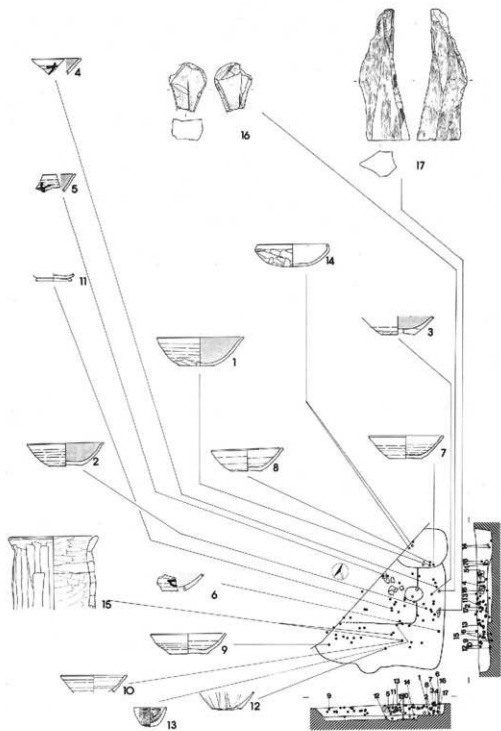


### H 2・9 号住居址土層説明

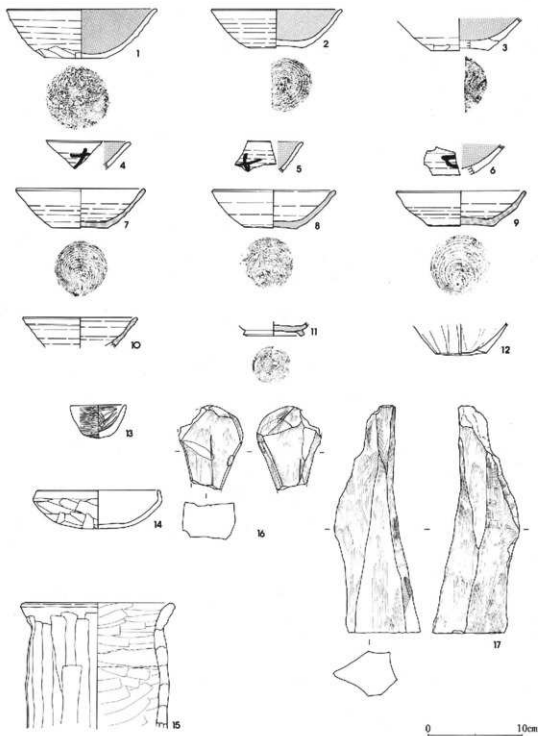
- 1 におい黄褐色土層 (10YR5/4)。  
 $\phi$ 3-5cm大ロームブロック・ $\phi$ 1cm大ローム粒(10YR7/6)を多数、 $\phi$ 5-7cm大パリスを多含する。
- 2 ローム2次堆積層 (10YR7/6)。
- 3 黄褐色土層(10YR5/6)。 $\phi$ 5cm大パリスを多含する。
- 4 灰黄褐色土層(10YR4/2)。 $\phi$ 5cm大パリスを多含する。
- 5 H 2 住居跡。
- 6 褐色土層 (10YR2/1)。  
 $\phi$ 1.5cm大ローム粒(10YR8/4)を極めて少量含む。
- 7 ローム2次堆積層 (10YR7/6)。
- 8 におい黄褐色土層 (10YR6/3)。  
 $\phi$ 3cm大ロームブロック(10YR7/6)・ $\phi$ 5cm大褐色ブロック(10YR4/1)・ $\phi$ 1cm大パリスを多含する。人為埋土層。
- 9 灰黄褐色土層 (10YR4/2)。  
 $\phi$ 5cm大ロームブロック(10YR7/6)・ $\phi$ 3-5cm大パリスを多含する。人為埋土層。  
 $\bullet$ 5・6層はH 2 住居リ方人海埋土層、H19積層もは8層と同一。

第8図 H 2・9 号住居址実測図





第9圖 H2・9号住居址遺物分布・接合關係圖



第10图 H 2 · 9号住居出土遺物実測図

#### 4) H3号住居址

##### 遺構 (第11・12図、図版四～五)

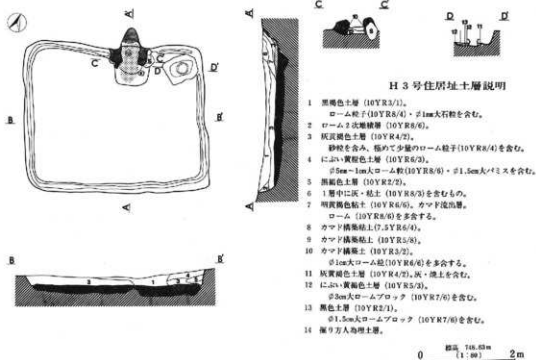
本址は調査区東南端中央部で検出された。他遺構との重複関係はないものの、畑境に埋設されていたコンクリート杭により本址覆土の中央部が攪乱を受けていた。

南北-3.2m、東西-3.9mの長方形プランを呈し、検出面からの壁高は20~30cmを測る。覆土は7層から成る自然堆積で、遺物の多くは床面上に推積する3層中に含まれており本址に伴うものと考えられる。それは、本址出土遺物の多くが完形もしくはそれに近い状態を保っていることから裏付けられる。床面はロームを主体とする埋土により平坦に版築され、その上に黒褐色粘土を敷設して叩縮られているが、堅固ではない。壁体は、第III層をそのまま使用し、壁下には所謂「壁溝」が巡らされ、柱穴は、有さない。

カマドは北壁中央やや東よりに構築される。褐色粘土を主体に軽石を芯材として用いる。カマド東脇の壁下には第13図-6の上師器長胴甕が胴下半部を人為的に打ち欠かれた状態で埋設されていたが、内容物は認められなかった。

##### 遺物 (第13図、図版十四)

須恵器・土師器・石器・石製品が出土している。他の住居址に比べ遺物の出土量は相対的に少ない。

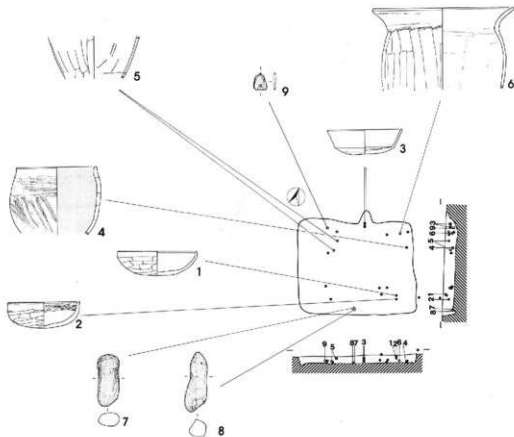


第11図 H3号住居址実測図

須恵器の器種には無台の坏と甕が認められるが、甕は図化不可能な破片である。坏のロクロからの切り離しはヘラにより行われており、その後回転ヘラ削り調整が施されている。当遺跡出土の須恵器の中でも際立って精選された胎土を有し、丁寧な成形・調整がなされている。

土師器の器種には坏・甕・鉢が認められる。未図化のものを含めて、坏は全て非ロクロ成形で丸底を呈し、外面口縁部下に手持のヘラ削り調整を加えている。甕は未図化のものも含め全て所謂「武蔵型の甕」である。5は体部下半、6は口縁部から体部上半のみ残存している。6の場合カマド脇に埋設された状態で出土したものであり、確実に本址に伴う遺物であり、所謂「武蔵型の甕」特有のヘラ削り調整による薄い器壁を呈しているものの、頸部下に加えられるヘラ削りの方向が本来の斜位ないしは横位ではなく縦位に施されている。また、器壁も厚目である事等定型化された所謂「武蔵型の甕」の範疇からは逸脱する要素を有している。

石器は所謂「こも石」・「編み物石」と呼称されている自然礫の長辺の両サイド中央をやや外れた位置に自然の凹や、人為的な敲打による凹を作出し、これを利用して籾・藁・藁等を編むとき



第12図 H3号住居址遺物分布・接合関係図

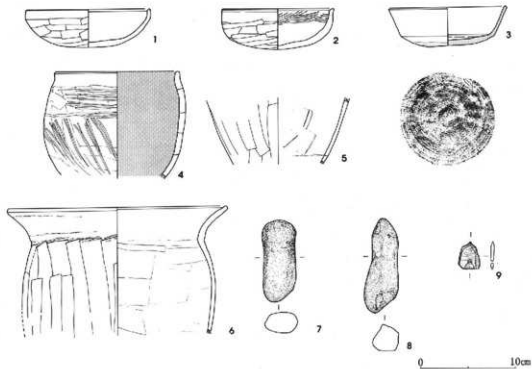
の鎌としたと考えられているものが2点出土している。また、石製品としては滑石製の模造織が1点出土している。長さ-2.9cm、巾-2.3cm、厚さ-2.8mmを測り、基部には径2mmの円孔が両面から穿たれている。尚、桃ないし梅の種子が1点本址カマド火床内より出土している。

### 5) H4号住居址

#### 遺構 (第14・15図、図版五)

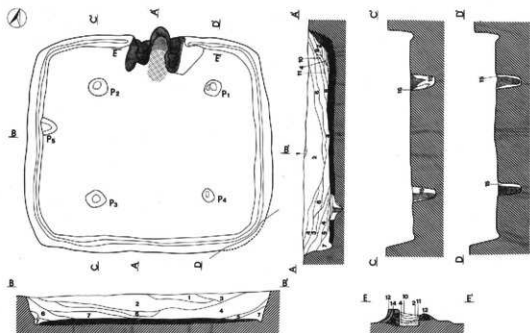
本址はH3号住居址の南西2mの位置に検出された。他遺構との重複関係はないが、東南コーナーが僅かではあるが調査範囲から外れるため完掘できなかった。

南北-4.6m、東西-5.2mの長方形プランを呈し、検出面からの壁高は平均50cmを測る。覆土は、10層から成る自然堆積である。床面はロームを主体とする埋土により平坦に版築され、その上にロームと黄橙色粘土の混在土を敷設して強く叩締めている。壁体は第III層をそのまま使用しており、壁下には所謂「壁溝」を巡らしている。Pitは5基が検出され、均等位置に配置されるP1~P4の4基が支柱穴であり、 $\phi 12$ cm大の柱痕を有していた。西壁下中央に検出されたP5については本址に伴う事は確かであるが、性格は不明である。また、P3・P4間の所謂「貼床」下から $\phi 8$ cm大の柱痕を有するPitが1基検出されている。このPitは、本址の掘り方時の所産ではなく、床面構築時以降に掘り込まれその後不必要となり、新たな床により密閉されたものである。



第13図 H3号住居址出土遺物実測図

カマドは北壁中央に構築されており、住居址掘り方の段階で袖基部を僅かに削り残し、床面の版築工程と並行して袖先端部分に軽石を芯材として固定した後これを黄橙色粘土で被覆して構築されている。天井部分は崩壊しておりその形状等は不明であるが、カマド流出層中には軽石などの芯材と考えられる物は僅かしか認められないことから考えて、粘土を主体として作られていたものと考えられる。



#### H 4 号住居址上層説明

- 1 におい・黄褐色土層 (10YR6/3)。  
 $\phi$ 7mm大ローム粒(10YR7/6)・ $\phi$ 1cm大パミスを多量、 $\phi$ 1cm大褐色土粒(10YR3/1)を少量する。
- 2 におい・黄褐色土層(10YR5/3)、混入物は1層と同様。
- 3 1層中に砂利を多量するもの。
- 4 におい・黄褐色土層(10YR6/4)、混入物は1層と同様。
- 5 灰黄褐色土層 (10YR5/7)。  
 $\phi$ 1-1.5cm大ローム粒(10YR6/6)を多量する。
- 6 黒褐色土層 (10YR3/1)。
- 7 黒褐色土層 (10YR3/1)。
- 8 暗褐色土層 (10YR3/3)、灰・炭土を少量する。
- 9 灰白色粘土(10YR8/2)、カマド流出層。
- 10 灰白色粘土 (10YR8/2)、カマド流出層。  
灰・炭を多量する。
- 11 灰の堆積層。
- 12 カマド構築粘土(10YR8/3)。
- 13 カマド構築粘土(10YR8/2)。
- 14 カマド構築土、ローム(10YR7/6)を主体に  
 $\phi$ 2cm大パミス・粘土(10YR8/2)を含む。
- 15 ローム2次堆積(10YR6/6)。 $\phi$ 5mm以下パミスを含む。
- 16 15層よりも明確な混入層。  
 $\ast$ 15・16層は人為堆土。
- 17 掘り方人为堆土層。

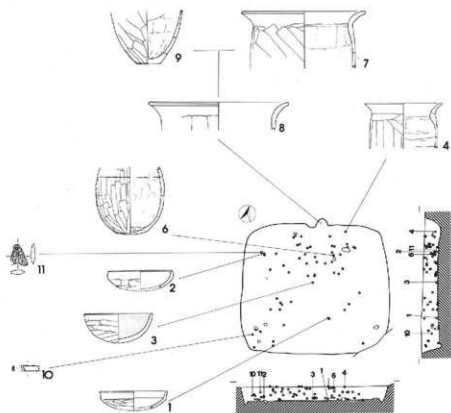
第14図 H 4 号住居址実測図

遺物 (第16図、図版十五)

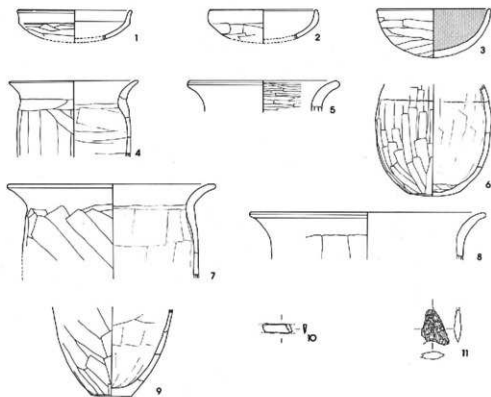
須恵器・土師器・鉄器・石器が出土している。須恵器の器種としては小形の短頸壺・無台の坏が認められるがいずれも小破片のため図化不可能である。この内無台坏は底部に糸切り痕が認められる事から本址に伴う物ではなく、混入遺物である。

土師器の器種としては、坏・甕が認められる。坏は3点図化したが、図化不可能なものも含め全て非クロコ成形であり、丸底を呈し、外面口縁部下に手持ちのへら削り調整が加えられている。3は内面黒色処理が施される。甕は未図化のものを含め本址出土遺物の大半を占めている。7・9のような所謂「武蔵型の甕」が量的には多い。5・6はへら磨き調整が施されるもので、球胴を呈するものと思われる。4・6はへら削り調整が外面頭部下に加えられる小形甕である。いずれも、頭部下にへら削り調整が施されるが所謂「武蔵型の甕」ではない。6の胎土は他の土師器とは異なり精選され精緻である。

鉄器は10の刀子が1点出土し、石器は11の黒曜石製の石鏃が1点混入していた。



第15図 H4号住居址遺物分布・接合関係図



第16図 H4号住居址出土遺物実測図

## 6) H5号住居址

### 遺構 (第17・18・19図、図版六)

本址はH4号住居址南西2mの位置で検出された。東南コーナーが調査区域外にかかるため調査はできなかった。F1号堀立柱建物址により切られる他は重複関係はない。

南北5.8m、東西7mの隅丸長方形プランを呈し、検出面からの壁高は平均50cmを測る。覆土は10層からなる自然堆積である。遺物は壁際を除く全面から出土しており、特定の土層には集中しないが、平面分布で見ると限りにおいてカマド前方に若干の集中が認められる。床面はロームを主体とする埋土により平坦に版築され、その上に赤褐色粘土とロームの混在土を敷設して強く叩締めている。壁体は第III層をそのまま使用しており、壁下には所謂「壁溝」が巡らされている。Pitは7基検出されたが、均等に配置されたP1～P4の4基が本址の柱穴である。深度50～65cmを測り、 $\phi 12\sim 20\text{cm}$ 大の柱痕が認められた。

カマドは北壁中央部分に構築されており、面取り加工を施した軽石を袖部分の芯材に、長径18cm大の未加工の軽石を煙道部分の芯材にそれぞれ用いて、黄橙色粘土により被覆している。天井



部は残存していないが、天井部分に懸架できるような構架材は認められない事から、粘土により構築されていたものと思われる。

#### 遺物 (第20図、図版十五)

須恵器・土師器・石製品が出土している。須恵器5点、土師器7点、石製品1点を図化した。総破片数は380に及び、その大半は所謂「武蔵型の甕」であった。

須恵器の器種には無台・有台の環・環蓋と未図化のものとして甕が認められる。環のロクロからの切り離しはへらにより行われており、無台のものは未調整、有台のものは回転へら削り調整が加えられている。未図化の甕は短頸広口の鉢型のもので、輪積みなし巻き上げ甲締め成形されている。

土師器の器種には環と甕が認められる。1の環は混入遺物のため本址には伴わない。本来本址に伴う環は2のような非ロクロ成形の丸底を呈するもので、外面口縁部以外は手持ちへら削り、内面にはへら磨き調整が施されている。甕は12を除く全てのものが所謂「武蔵型の甕」である。12の甕は胎土・成形・調整は何ら所謂「武蔵型の甕」と変わらない。しかし、そのプロポーションは長胴を呈する所謂「武蔵型の甕」とは異なり球胴を呈している。H1号住居址-11の甕とは同系列に属するものと考えられる。

石製品としては、13の滑石製の垂れ飾りが1点出土している。2.5×2.8cmの楕円形を呈し、約5mmの厚さを有する。中心からやや偏ってφ3mmの穿孔が両側からなされている。長径の片側面には1ヶ所浅い刻りが認められる事から曲玉の模造品の可能性もある。

#### 7) H6号住居址

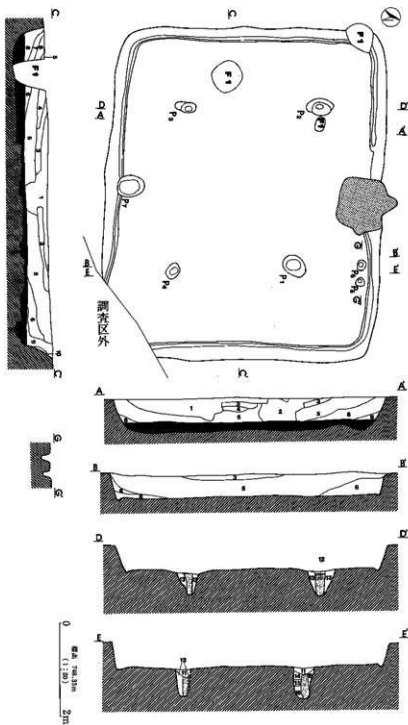
##### 遺構 (第21・22図、図版七)

本址は調査区の中央、H5号住居址の北方17mの位置に検出された。M1号溝址により西壁を含む全体の1/4が消失している。

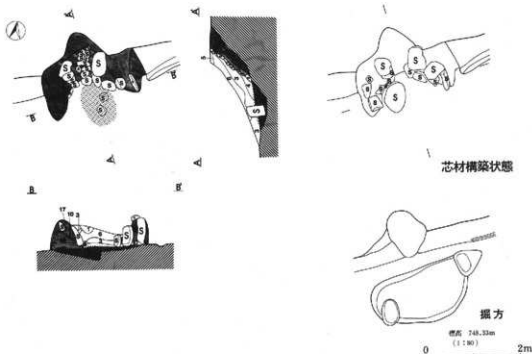
南北-4.2m、東西は推定で4.6mの隅丸方形プランを呈する。検出面からの壁高は平均40cmを測り、覆土は5層から成る自然堆積である。床面はロームを主体とする壤土により平坦に版築され、その上に赤褐色粘土を敷設して堅く叩締められている。壁体は第三層をそのまま使用している。所謂「壁溝」は有さない。Pitは4基が均等位置に検出され、床面からの深度は40-64cmを測り、φ12cm大の柱痕が認められた。尚、P2については立て替えた可能性がある。

カマドは北壁中央に構築されており、西袖と火床が残存していた。床面に散乱していた火熱を受け面取加工を施した軽石を芯材として、これを粘土により被覆して構築されていたものと思われる。

遺物は住居のほぼ全面から出土しており、特定の層や位置には集中していない。量的には極めて少ない。



第17图 H5号住居址实测图



芯材構築状態

掘方

標高 748.33m  
(1:100)

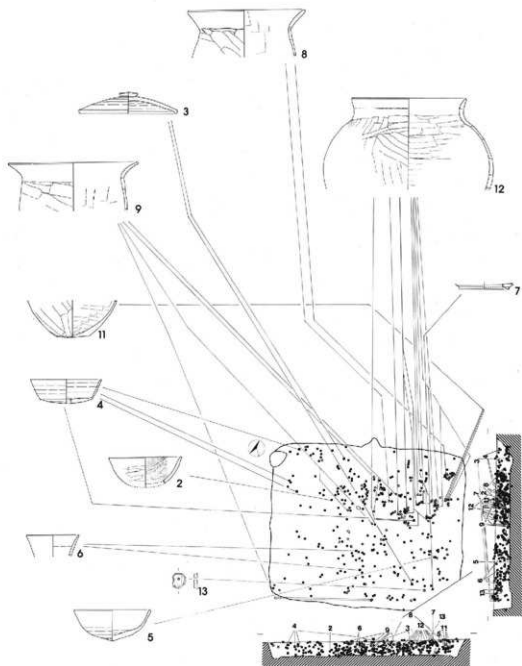
0 2m

### H 5号住居址土層説明

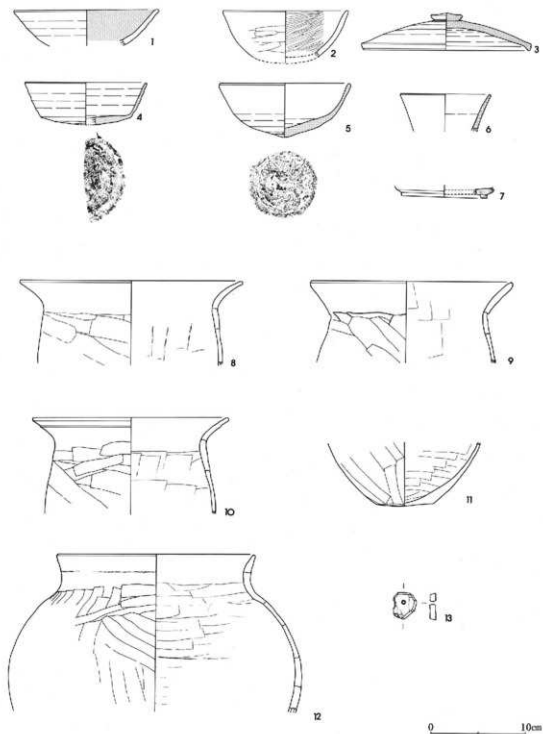
- 1 暗褐色土層 (10YR2/3).  
ローム粒子(10YR8/6)・φ3-5mm大パミス・石粒を含む。
- 2 濃い黄褐色土層 (10YR4/3).  
ローム粒子(10YR8/6)・φ2-3mm大パミス・φ1mm大粘質土粒 (10YR4/7)を含む。
- 3 灰黄褐色粘質土層 (10YR4/2).  
黒褐色土層 (10YR2/2).  
ローム粒子(10YR8/6)・φ2-3mm大パミス・砂粒を含む。
- 4 褐色土層 (10YR4/4).  
ローム粒子(10YR8/6)・φ2-5mm大パミスを含む。
- 5 基本的には5層と同層であるが、相境が高い層。
- 6 濃い黄褐色砂質土層 (10YR4/3).  
φ2-5mm大パミス・砂粒を含む。
- 7 黄褐色土層 (10YR3/2).  
ローム粒子・φ2-3mm大ロームブロック(10YR8/6)・φ3mm大パミスを含む。
- 8 暗褐色土層 (10YR3/3).  
ローム粒子(10YR8/6)・φ2-3mm大パミスを含む。

- 9 褐色土層 (10YR4/4).ローム粒子・φ2-3mm大パミスを含む。
- 10 暗褐色土層 (10YR4/4).  
ローム粒子(10YR8/6)・φ1-2mm大パミスを含む。
- 11 暗褐色土層 (10YR2/3).  
ローム粒子(10YR8/6)・φ3mm大パミスを含む。
- 12 暗褐色土層 (10YR3/4).  
ローム粒子(10YR8/6)・φ1mm大スコリアを含む。
- 13 濃い黄褐色土層 (10YR5/3).  
ローム粒子(10YR8/6)・φ1mm大パミス・灰白色粒子(10YR8/2)を含む。
- 14 黒褐色土層 (10YR2/3).  
ローム粒子(10YR8/6)・φ1mm大スコリアを含む。
- 15 濃い黄褐色砂質土層(10YR5/4).5mm大パミスを含む。  
φ13-16mmは人工埴土。
- 16 カマド構築粘土 (10YR7/4).  
ローム(10YR8/6)を少含する。
- 17 カマド構築粘土(10YR6/3).  
ローム(10YR8/6)を含む。
- 18 掘り方人工埴土。

第18図 H 5住居址カマド実測図



第19圖 II 5住居址遺物分布・接合關係圖



第20图 H 5 住居址出土遺物実測図

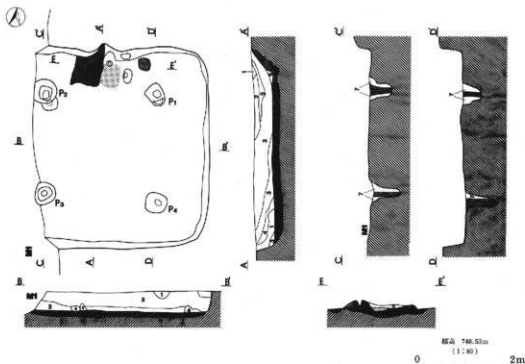
遺物 (第23図、図版十五)

須恵器・土師器・鉄器が出土している。土師器2点、鉄器1点を図化した。未図化のものはその大半が所謂「武蔵型の甕」片である。

須恵器の器種には無台の坏・坏蓋・甕が存在するが、いずれも小破片であり図化できなかった。量的には極めて少なく、土師器の1/10である。

土師器の器種には坏・甕が認められる。坏は2のように丸底を呈し、体部との境に稜を有して口縁部が外反しながら立ち上がる身の浅い皿状のものは希で、他の図化不可能なものは体部と口縁部の境に稜をもたないものである。いずれも非ロクロ成形である。甕は全て所謂「武蔵型の甕」である。図化した1とは異なる個体の破片も認められたが、細片のため数は確定できない。1の場合、器壁が5mm前後とやや厚く、また外面頸部下に施されるヘラ削りも縦に近い斜位であり、息も長い点が通常のものとはやや異なる。

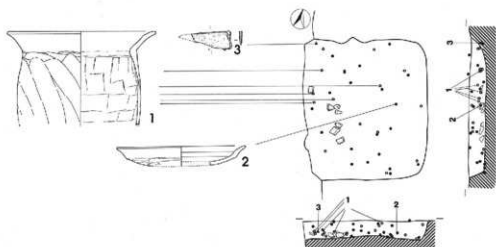
鉄器は3の鎌が1点出土している。刃渡り6cm、最大巾2.4cm、最大厚5mmを測る。



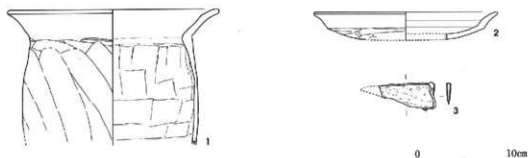
H 6号住居址土層説明

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 黒色土層 (10YR2/1)。<br/>φ10cm大ローム瓦(10YR8/6)を少含する。</p> <p>2 におい質褐色土層(10YR5/3)。<br/>φ10cm-30cm大ロームブロック(10YR8/6)・φ50cm大黒色ブロック(10YR2/1)を多含する。</p> <p>3 2層中における炭人物の含有率の低い層。</p> | <p>4 ローム2次堆積層。</p> <p>5 2層中にカマド構築粘土(10YR6/4)・灰・焼土・炭を多含する。カマド流出層。</p> <p>6 カマド構築粘土(10YR6/4)。</p> <p>7 におい質褐色土層(10YR4/3)。<br/>ローム(10YR7/8)を多含する。</p> <p>8 振り方人為埋土層。</p> |
|---|---|

第21図 H 6号住居址実測図



第22図 H6号住居址遺物分布・接合関係図



第23図 H6号住居址出土遺物実測図

## 8) H7号住居址

### 遺構 (第24図、図版七)

本址はH6号住居址の北北西6mの位置に検出された。調査区域外に係るため全体の約1/4を調査したに過ぎない。M1号溝址により切られる。

東西は不明であるが、南北4mを測る。検出面からの壁高は平均75cmと深い。壁は垂直に掘り込まれておらず、約15度開いている。掘り方はほとんどなく、赤褐色粘土とロームの混在土を薄く敷設して叩締めて平坦な床を作り出しているが、さして堅固ではない。Pitは床面状には認められず、コーナー壁面に掘り込まれていた。壁体は第III層をそのまま使用しており、所謂「壁溝」は持たない。調査範囲内にはカマドは存在せず、遺物の出土も皆無であった。

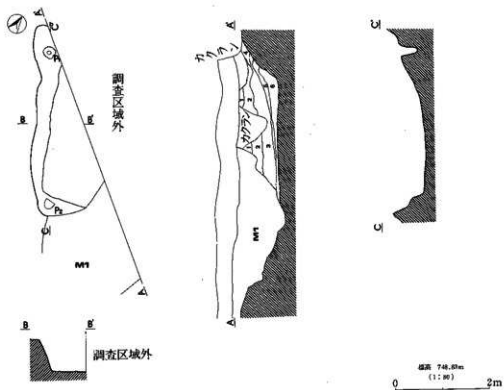
以上のように本址は極めて特異な構造をもった遺構であり、床が構築されていた事、柱穴を有する事を除けば本址を住居址と断定する根拠は一切ない。

## 9) H 8号住居址

遺構 (第25・26図、図版八)

本址は調査区西端において検出された。他の住居址とはM1・2号溝址により隔絶された位置にある。他遺構との重複関係は持たないが、かつて調査区には雙豚場が存在しており、豚舎の建築・取り壊しにさいしての擾乱により東半分が消失していた。

南北—5m、東西は、不明であるが、方形のプランを有していたものと推測される。検出面から



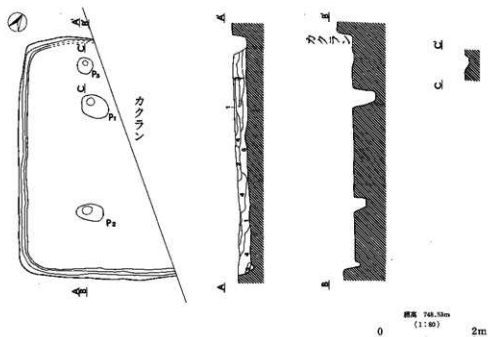
### H 7号住居址土層説明

- 1 黒褐色土層(10YR6/6)。  
φ5-7cm大ローム粒(10YR8/6)・パミスを含む。
- 2 黒褐色土層(10YR6/6)。  
φ2cm大ロームブロック(10YR6/6)・φ5cm大黒色ブロック(10YR2/1)を多量、φ1cm大パミスを少量する。
- 3 ローム2次堆積層(10YR8/4)。  
水平方向に厚さ3-5cmの黒色土(10YR2/1)を含む。φ1-1.5cm大パミスを多量する。
- 4 細かい黄褐色砂質土層(10YR5/3)。
- 5 黒色土層(10YR2/1)。上面に薄い砂利の地層が認められる。
- 6 4層中に砂粒・φ2-3cm大ロームブロック(10YR8/6)・パミス粒子を多量する。とする。

第24図 H 7号住居址実測図



の壁高は平均27cmを測り、覆土は人為埋土であった。床面は堀り方をほとんどとない。赤褐色粘土とロームの混在土を薄く敷設して平坦に叩締められていた。床面上からは3基のPitが検出されたが、柱穴と思われるものはP1・P2の2基である。おそらくは、擾乱により消失した部分にP1・P2に対応する2基のPitが存在したと思われる。平面楕円形を呈して、深度30~50cmを測る。柱底は確認されなかった。カマドは残存しておらず、擾乱により消失したと思われる。



#### H 8号住居址土層説明

- 1 黒褐色土層 (10YR3/1).  
φ8cm大ロームブロック(10YR6/6)・φ1cm大パミス含む。
  - 2 濃い黄褐色土層(10YR5/3).  
φ1.5cm大ローム粒(10YR6/6)を少量、φ6mm以下パミスを多含む。
  - 3 明黄褐色土層(10YR6/6).  
φ1cm大石粒・パミスを含む。
  - 4 灰褐色砂質土層(10YR4/1).
  - 5 灰褐色砂質土層(10YR4/1).  
φ3~5cm大明黄褐色ブロック(10YR6/6)を含む。
- \*本址覆土は全て人為埋土。

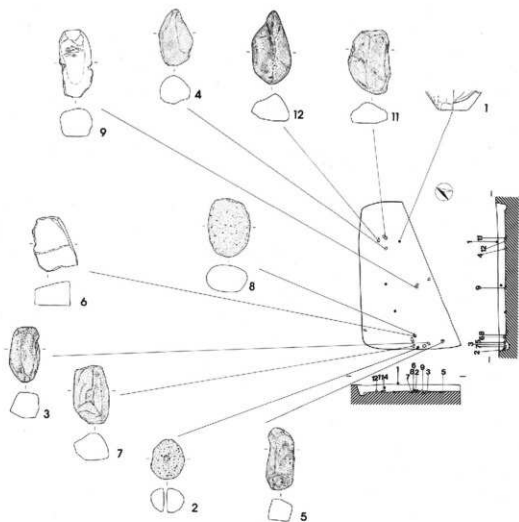
第25図 H 8号住居址実測図

遺物（第27図、図版十六）

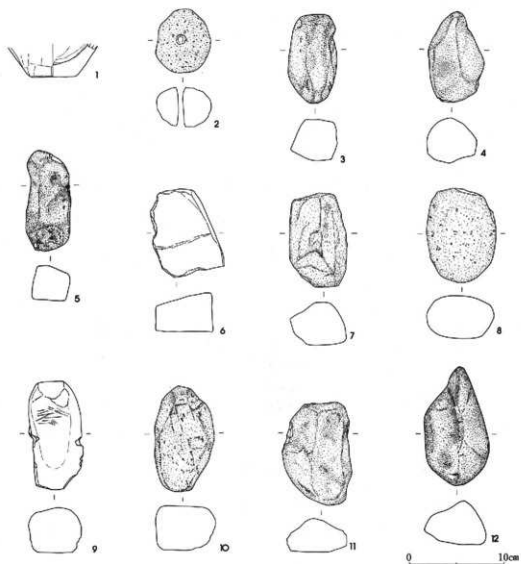
土師器・石製品が出土している。土師器1点、石製品11点を図化した。土師器の出土総数は4点にすぎず、図化した1も覆土の最上面から出土している。そのため、本址の時期を決定する根拠となる遺物は存在しない。

1は土師器の甕の底部である。器壁は厚く、ナデ気味のヘラ削りが施されている。

2についてはその用途は不明であるが、3～12は所謂「こも石」・「編み物石」と呼称されているものである。全てのものが中心をやや偏った両側面に敲打による凹が作出されている。9・10の2点については金属器による加工痕が認められる。2は楕円形の軽石の中心部に両側からφ6mmの穿孔がなされる。



第26図 H 8号住居址遺物分布・統合関係図



第27图 H 8号住居址出土遺物実測図

## 第2節 堀立柱建物址

### 1) F1号堀立柱建物址

#### 遺構 (第29図、図版八)

本址は調査区南端より北東に24mの位置で検出された。H5号住居址を切り、M1号溝址に切られる。

本来は計13基のPitにより構成されていたものと推測されるが、西辺中央に存在したであろうPitはM1号溝址により消失している。東西3間、南北2間の総柱の構成をとるが、南北列の西から2列目のみ、3間の構成を取る。いずれのPitも長径45~95cmの楕円形の平面プランを呈し、検出面からの深度は18~65cmを測る。相対的に東・南辺のPitの方が深い、柱間は8~2.4mで一定しない。覆土はロームを主体とする人為埋土であったが、柱痕は確認できなかった。出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

### 2) F2号堀立柱建物址

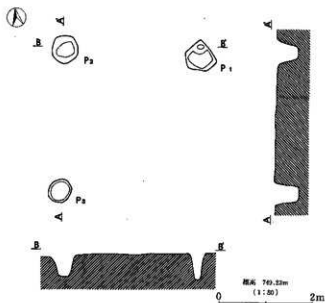
#### 遺構 (第28図)

本址はH2号住居址の西方2.5mの位置に検出された。調査区域外に係るため3基のPitにより構成される北西コーナー部分が確認されたに過ぎない。

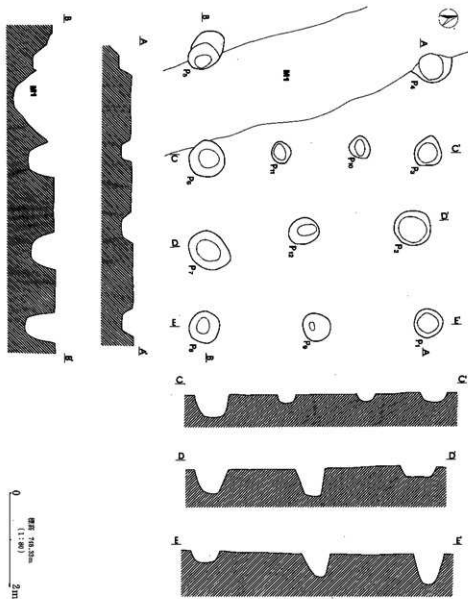
Pitは径50~70cm大の円形の平面プランを呈し、検出面からの深度は40~60cmを測り断面は逆梯形である。

3基全てにおいて確認された柱痕はφ14cm大であり、覆土はロームを主体とする人為埋土であった。柱間は調査範囲内においては3mで一定している。全体の構成・規模については不明である。

本址もF1号堀立柱建物址同様に出土遺物は皆無であり、時期は不明である。



第28図 F2号堀立柱建物址実測図



第29图 F1号孺立柱建物址实测图

## 第3節 土坑

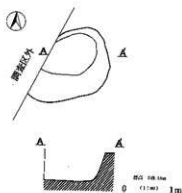
### 1) D 1号土坑

#### 遺構 (第30図、図版三)

本址はH 2号住居址の北東コーナー部分と重複し、これを切って構築されていた。西端部分の全体の約1/5ほどが調査区域外に係るため完掘はされていない。

東西が推定で1.9m、南北1.4mの楕円形プランを呈し、検出面からの深度は60cmを測る。底面は平坦であるが、叩締められてはいない。覆土はH 2号住居址第1層に近似した、にぶい黄褐色を呈する自然堆積土である。

確実に本址に伴う遺物は認められず、出土した土器片もH 2号住居址に帰属するものであった。そのため本址の時期は確定できない。



第30図 D 1号土坑実測図

## 第4節 溝址

### 1) M 1号溝址

#### 遺構 (第31図、図版七)

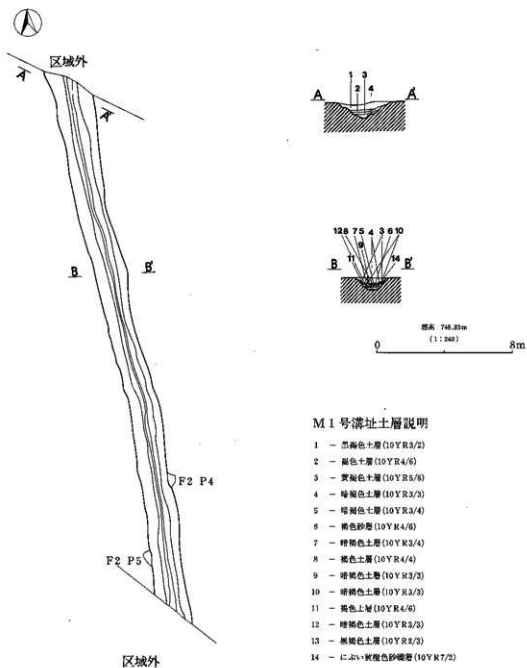
本址は調査区の中央やや西側を南北に縦断する。H 6・7号住居址、F 1号堀立柱建物址と重複関係にあり、これらを切っている。1989年に本調査区の北方約30mの場所で御代田町教育委員会が調査を実施した際には本址と接続する可能性を有する溝址は検出されておらず、本址は田切白地を南北に縦断する可能性が高いものと思われる。また、本址を境に調査区の西側では極端に遺構密度が低くなる。

巾2m前後で検出面からの深度は平均80cmを測るが、深度は南に向かうほど徐々に増している。覆土中には砂利層が複数認められ、水流により白らが運び込んだ土砂により段階的に埋没したものと思われる。

本址断面は水流により変形をきたしているが、基本的には整った逆梯形を呈している。前述したような規格的な位置関係等も含め自然流路ではなく、人工の溝址の可能性が強い。

#### 遺物 (第32図)

土師器・須恵器・石器が出土している。出土量は多く、縄文時代の打製石器、弥生時代後期・古墳時代後期～平安時代の土器等時期的にも多岐にわたるが、遺構の性格上本址の時期は確定



第31图 M1号沟址实测图

出来ない。尚、径5cm大の鉄滓が5点覆土中より出土している。

## 2) M2号溝址

### 遺構 (第33図、図版九)

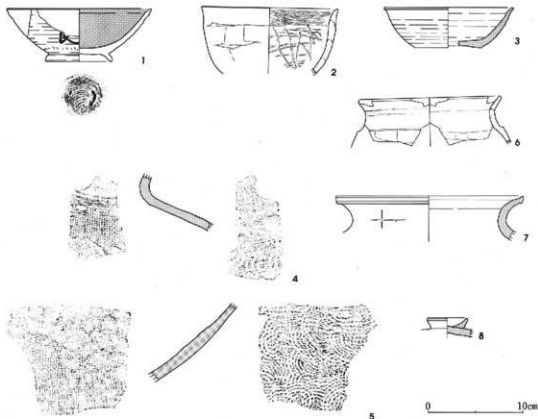
本址はM1号溝址の西側を調査区北端で4m、南端で12mの間隔を空けて南北に縦走する。他遺構との重複関係は持たない。1989年の御代田町教育委員会の調査で確認されたM-7号溝状遺構に本址が接続するものと思われる。

巾は北端部分で6.4m、南端部分が8.6mと南に向かう程拉張している。検出面からの深度は調査区内では一定していないが、最浅部分でも1mに達する。覆土の大部分は砂利そのものか、もしくは大量に含んでいる。

本址は自然流路と考えられるが、その生成時期は不明である。

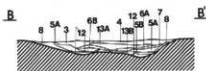
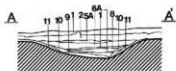
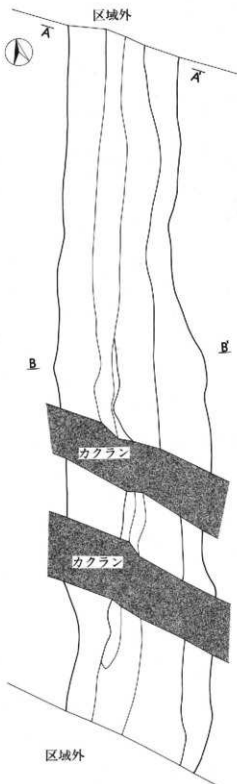
### 遺物 (第32図)

出土量は極めて少なく、いずれも摩耗が激しい。図化した2点の須恵器甕以外の未図化の土器も須恵器の占める割合が高い。



第32図 M1・M2号溝址出土遺物実測図





総長 748.83m

0 (1:200) 8m

### M 2号溝址土層説明

- 1 - 雑土
- 2 - 基本層序第1層
- 3 - 褐色土層(10YR5/1).  
5mm大の石粒を小含する。
- 4 - 褐色土層(10YR5/1).  
5mm大の石粒・10YR6/6ローム粒子を小含する。
- 5a - 上い黄褐色土層(10YR6/4).  
10YR6/4ローム粒子・褐色土層(10YR5/1)・砂粒を多含する。
- 5b - 5a層中におけるローム粒子含有率の低い層。
- 6a - 3層中に10YR6/6ローム粒子を多含する層。
- 6b - 6a層におけるローム粒子含有率の低い層。
- 7 - 黒褐色土層(10YR3/1)
- 8 - 10YR6/4ローム。
- 9 - 砂粒層
- 10 - 砂層  
10YR6/4ローム粒子多含。
- 11 - 10YR6/6ローム。
- 12 - 3層中に砂粒を多含する層。
- 13a - 10YR6/6ロームと砂の混在層。
- 13b - 10YR6/6ロームと砂粒の混在層。

第33図 M 2号溝址実測図

第1表 H1号住居址出土遺物一覧表

採出番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整	備考
7-1	土師器環	(13.5) (3.6)	丸底。 内寄気味に立ち上がる口縁部。	非ロクロ。 内面・外面口辺一ナデ。 口辺を除く外面へヘラ削り。	回転実測。
7-2	土師器環	(14.2) (4.7)	丸底。 内寄気味に立ち上がる口縁部。	非ロクロ。 内面・外面口辺一ナデ。 口辺を除く外面へヘラ削り。	回転実測。
7-3	土師器環			ロクロ。 内面黒色処理。	断面実測。 墨書。 混入遺物。
7-4	須恵器蓋	(16.5)	天井部扁平。 口縁端部が弱く外反する。	ロクロ。 外面天井部へラ削り。	回転実測。
7-5	須恵器 有台環	(17.6) 3.6 (12.8)	広い底部。 直線に割く口縁部。	ロクロ。付け高台。	回転実測。
7-6	須恵器環	42.6 4.5 6.0	外底周縁が凹。 縁やかに外反しながら開く口縁部。	ロクロ。 底部へラ切り未調整。	完全実測。
7-7	須恵器 板?			付け高台。 へラ削り一ナデ。	完全実測。
7-8	土師器甕	20.2	「く」字状に外反する口縁部。	非ロクロ。 内面へラ削り一ナデ。 外面へラ削り。	回転実測。
7-9	土師器甕	(24.8)	「く」字状に外反する口縁部。	非ロクロ。 内面へラ削り一ナデ。 外面へラ削り。	回転実測。
7-10	土師器甕	(21.0)	口頸部基部が屈折しない。	非ロクロ。 内面基部がへラナデの他は全てヘラミガキ。	回転実測。
7-11	土師器甕	(24.4)	「く」字状に外反する口縁部。 球胴。	非ロクロ。 内面へラナデ 外面へラ削り。	完全実測。
7-12	須恵器甕		丸底。	輪轆しない巻き上げ+印。 ロクロナデ。	完全実測。 焼成時の置き內在 底部に付着。
7-13	須恵器甕	(29.4)	短い口頸部。 鉢形	輪轆しない巻き上げ+印。 ロクロナデ。	回転実測。

第2表 H2・9号住居址出土遺物一覧表

採出番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整	備考
10-1	土師器環	15.6 5.2 6.6	口縁端部が弱く外反。	ロクロ。 内面黒色処理。 底部・周縁手持ちへラ削り。	完全実測。
10-2	土師器環	(13.6) 4.1 (5.6)	口縁端部が弱く外反。	ロクロ。 内面黒色処理。 糸切り未調整。	回転実測。
10-3	土師器環	(6.0)		ロクロ。 内面黒色処理。糸切り未調整。外底屈縁へラ削り。	回転実測。
10-4	土師器環			ロクロ。 内面黒色処理。	破片実測。 墨書。
10-5	土師器環			ロクロ。 内面黒色処理。	破片実測。 墨書。

10-6	土師器 杯			ロクロ。 内面黒色処理。	破片実測。 温書。
10-7	須恵器 杯	13.4 4.2 5.9	直接的に開く口縁。	ロクロ。 糸切り未調整。	完全実測。
10-8	須恵器 杯	12.8 4.1 5.7	口縁端部が弱く外反。	ロクロ。 糸切り未調整。	完全実測。
10-9	須恵器 杯	(13.5) 3.7 (6.8)	体部平ばで弱く屈折して立ち上がる口縁部。	ロクロ。 糸切り未調整。	回転実測。
10-10	須恵器 杯	(12.0)	口縁端部がやや肥厚する。	ロクロ。	回転実測。
10-11	須恵器 有台杯	5.6	外傾する高台。	ロクロ。 糸切り→竹高台。	完全実測。
10-12	土師器 甕	(5.4)	平組でない底部。	非ロクロ。 内面→ヘラ削り→ナデ。 外面→ヘラ削り。	回転実測。
10-13	土師器 手捏	(5.7) (3.5)	丸底。	非ロクロ。 ヘラ磨き。	回転実測。
10-14	土師器 杯	12.6 4.1	丸底。 口縁端部が内屈。	非ロクロ。 外面口縁端部を除きヘラ削り、他はナデ。	完全実測。
10-15	土師器 甕	(15.3)	長胴。	非ロクロ。 内面→ヘラナデ。 外面→ヘラ削り。	回転実測。
10-16	砥石				全ての面に使用痕が認められる。 欠損。
10-17	砥石	24.0 8.0 4.6			短方向の2面を除き使用。

第3表 H3号住居址出土遺物一覧表

押付番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整	備考
13-1	土師器 杯	(13.0) (4.0)	丸底。 口縁端部が直立。	非ロクロ。 口縁端部を除く外面はヘラ削り、他はナデ。	回転実測。
13-2	土師器 杯	11.8 5.4	丸底。 口縁端部が直立。	非ロクロ、内面→ハケメ→ナデ、外面→口縁端部を除きヘラ削り。	完全実測。
13-3	須恵器 杯	12.2 4.2 4.5	体部下半に稜を有して立ち上がる。	ロクロ。 ヘラ削り→回転ヘラ削り。	完全実測。
13-4	土師器 鉢	12.4	口縁端部が内傾しながら立ち上がる。	非ロクロ、内面黒色処理、外面→ヘラ削り→ヘラ磨き。	完全実測。
13-5	土師器 甕			非ロクロ。 内面→ヘラ削り→ナデ、外面→ヘラ削り。	回転実測。
13-6	土師器 甕	23.0	「く」字状に外反する口縁部。	非ロクロ。 内面→ヘラ削り→ナデ、外面→ヘラ削り。	完全実測。
13-7	こも石 福み物石	8.7 3.5 2.3			完全実測。 側面に敲打痕。

13-8	こも石 細み物石	10.0 3.5 3.0			完全実測。 側面に敲打痕。
13-9	横造石礎	3.0 2.2 0.4	平基。 有孔。		完全実測。

第4表 H4号住居址出土遺物一覧表

神岡番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整	備考
16-1	土師器環	(11.8)	口縁端部が隆を成して立ち上がる。 丸底。	非ロクロ。 外面口縁端部以下がヘラ削りの他はナデ。	回転実測。
16-2	土師器環	(11.2)	口縁端部が内寄。 丸底。	非ロクロ。 外面口縁端部以下がヘラ削りの他はナデ。	回転実測。
16-3	土師器環	(11.8) (5.2)	丸底。	非ロクロ。内面黒色処理。 外面ヘラ削り。	回転実測。
16-4	土師器甕	(13.2)	緩やかに外反する口縁部長調。	非ロクロ。 内面ヘラナデ。 外面ヘラ削り。	回転実測。
16-5	土師器甕	(15.4)	大きく外反する口縁部。	内面ヘラ磨き。 外面ナデ。	回転実測。
16-6	土師器甕	(5.0)	丸底気味の底部。	非ロクロ。 内面ヘラ削りナデ。 外面ナデ気味のヘラ削り。	回転実測。
16-7	土師器甕	(21.8)	緩く外反する口縁。	非ロクロ。 内面ヘラ削りナデ。 外面ヘラ削り。	完全実測。
16-8	土師器甕	(24.8)		非ロクロ。 内面ナデ。 外面ヘラ削り。	回転実測。
16-9	刀子	(1.3) (0.3)			完全実測。 欠損。
16-10	石槌	(0.4)	凹基。		完全実測。 欠損。混入遺物。 黒曜石。

第5表 H5号住居址出土遺物一覧表

神岡番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整	備考
20-1	土師器環	(15.0)		ロクロ。 内面黒色処理。	回転実測。 混入遺物。
20-2	土師器環	(13.0)	丸底。 口縁端部が弱く外反する。	非ロクロ。 内面ヘラ磨き。 外面ヘラ削り。	回転実測。
20-3	須恵器 環蓋	(17.3) (4.0)	扁平碗宝珠つまみ 端部断面三角形。	ロクロ。 天井部外面回転ヘラ削り。	回転実測。
20-4	須恵器環	(12.8) 4.5 (9.6)	平皿でない底部。 底部と口縁部の境に 隆を形成する。	ロクロ。 ヘラ削り→回転ヘラ削り。	回転実測。
20-5	須恵器環	(13.6) 4.5 9.6	尖形状の丸底。	ロクロ。ヘラ削り。	回転実測。
20-6	須恵器 有台環	(9.4)	口縁部が緩やかに開く。	ロクロ。	回転実測。

20-7	須恵器 看台杯	(7.0)	断面四角形の高台。	ロクロ。 付け高台。 回転承切り。	回転実測。 混入遺物。
20-8	土師器甕	(22.2)	「く」字状に外反する口縁部。	非ロクロ。 内面一ヘラ削り→ナデ。 外面一口縁部除きヘラ削り。	回転実測。
20-9	土師器甕	(23.4)	「く」字状に外反する口縁部。	非ロクロ。 内面一ヘラ削り→ナデ。 外面一口縁部除きヘラ削り。	回転実測。
20-10	土師器甕	(20.6)	「く」字状に外反する口縁部。	非ロクロ。 内面一ヘラ削り→ナデ。 外面一口縁部除きヘラ削り。	回転実測。
20-11	土師器甕	(6.0)	底部小径。	赤ロクロ。 内面一ヘラ削り→ナデ。 外面一ヘラ削り。	回転実測。
20-12	土師器甕	(20.6)	直立する口縁部。 球脚。	非ロクロ。 内面一ヘラナデ。 外面一口縁部除きヘラ削り。	回転実測。
20-13	滑石製 模造品	2.7 2.5 0.6	不正楕円形。	打ち欠き、研磨。	回転実測。曲玉?

第6表 H6号住居址出土遺物一覧表

押出番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整	備考
22-1	土師器甕	(21.8)	「く」字状に外反する口縁部。	非ロクロ。 内面一ヘラ削り→ナデ。 外面一口縁部除きヘラ削り。	完全実測。
22-2	土師器杯	(19.2)	底部と口縁部の境に 段を有する。 口縁部外反。	赤ロクロ。 外面底部ヘラ削り後はナデ。	回転実測。
22-3	鉄製鎌	(6.0) 3.0 0.4	刃部が湾曲しない。		完全実測。

第7表 H8号住居址出土遺物一覧表

押出番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整	備考
26-1	土師器甕	4.6		非ロクロ。 内面一ヘラナデ。 外面一ヘラ削り。	回転実測。
26-2	軽石製?	7.7 5.6 4.2			完全実測。
26-3	こも石 縮み物石	9.2 5.0 4.4			完全実測。
26-4	こも石 縮み物石	9.6 5.8 4.8			完全実測。
26-5	こも石 縮み物石	10.4 4.6 3.6			完全実測。 側面に敲打痕。
26-6	こも石 縮み物石	9.2 6.0 4.0			完全実測。 側面に敲打痕。
26-7	こも石 縮み物石	9.8 5.8 4.4			完全実測。 側面に敲打痕。
26-8	こも石 縮み物石	9.8 7.0 4.4			完全実測。 側面に敲打痕。

26-9	こも石 編み物石	11.4 5.6 4.8		砥石として使用?	完全実測。 側面に敲打痕。 金属による加工。
26-10	こも石 編み物石	11.0 6.4 4.6			完全実測。 側面に敲打痕。 金属による加工。
26-11	こも石 編み物石	12.4 6.8 4.6			完全実測。
26-12	こも石 編み物石	12.4 6.8 4.6			完全実測。

第8表 M1号溝址出土遺物一覧表

神岡番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整	備考
31-1	土師器碗	(15.2) 5.6 7.0	有台。 内は内湾気味に外傾する。	非ロクロ。 内面黒色処理。 糸切り→付け高台。	回転実測。 墨書。
31-2	土師器鉢	(14.6)	口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部で外反する。	非ロクロ。 内面→ヘラ磨き。 外面→ヘラ削り。	回転実測。
31-3	須恵器環	(13.8) 4.3 (7.0)	口縁端部が外反。	ロクロ。 回転糸切り。	回転実測。
31-6	土師器甕	(14.6)	「コ」字気味の口縁部。	非ロクロ。 内面→ヘラ削り→ナデ。 外面→ヘラ削り。	回転実測。
31-7	須恵器甕	(20.0)	口縁端部がつまみあげられる。	ロクロ。 外部頸部にヘラによる刻文。	回転実測。
31-8	須恵器 環壺		皿状つまみ。	ロクロ。	回転実測。

第9表 M2号溝址出土遺物一覧表

神岡番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整	備考
31-4	須恵器甕			輪轆ないし巻き上げ+印締	断面実測。
31-5	須恵器甕			輪轆ないし巻き上げ+印締	断面実測。

第9表 Pit一覧表 No-1

No.	概 土	出土遺物	長径	深度
1	1層-10YR2/2、混入物無し。 2層-10YR8/6ローム二次堆積。10YR2/2粒子・φ5mm大バミス多含。		40cm	23cm
2	1層-10YR2/2、φ3cm大10YR8/6ロームブツを含む。 2層-10YR8/4ローム二次堆積。10YR2/2粒子・φ5mm大バミス多含。	土師器腰-1片	55	21
3	1層-10YR2/3、混入物無し。 2層-10YR6/4、10YR2/3粒子多含。		40	36
4	1層-10YR7/4、φ5mm大バミス・10YR3/2粒子多含。 2層-10YR3/2、混入物無し。		65	34
5	1層-10YR3/1、10YR8/4ローム粒子多含。		60	10
6	1層-10YR3/1、10YR7/6ローム粒子少含。		30	10
7	1層-10YR2/2、φ3cm大10YR8/6ロームブツ少含。		50	25
8	1層-10YR2/2、φ1.5cm以下バミス・10YR7/6ローム粒子多含。		40	19
9	1層-10YR4/1、φ1cm大バミス・10YR7/6ローム粒子を含む。		50	11
10	1層-10YR4/1、φ1cm大バミス・10YR7/6ローム粒子を含む。		50	19
11	1層-10YR8/4ローム二次堆積。混入物無し。 2層-10YR3/2、混入物無し。		40	18
12	1層-10YR3/1、φ1cm大バミス・10YR7/6ローム粒子少含。		40	45
13	1層-10YR3/1、φ1cm大バミス・10YR7/6ローム粒子少含。	土師器腰-1片	55	29
14	1層-10YR3/1、φ1cm大バミス・10YR7/6ローム粒子少含。		40	25
15	1層-10YR6/4、10YR7/6ローム粒子多含。 2層-10YR3/1、φ1cm大バミス・10YR7/6ローム粒子少含。		50	30
16	1層-10YR8/4ローム二次堆積。φ14cm10YR3/1柱痕を有する。		45	18
17	1層-10YR3/2、10YR7/6ローム粒子多含。Pit18を切る。		50	28
18	1層-10YR4/3、φ3-5cm大10YR3/1ブツを含む。Pit17に切られる。		50	39
19	1層-10YR3/2、10YR7/6ローム粒子・砂粒を含む。		50	36
20	1層-10YR3/2、10YR7/6ローム粒子・砂粒を含む。		50	39
21	1層-砂の堆積。 2層-10YR3/3、砂粒多含。		55	38
22	1層-10YR7/6ローム二次堆積。 2層-10YR3/1、φ1cm大バミス・10YR7/6ローム粒子多含。		50	35
23	1層-10YR8/4ローム二次堆積。10YR4/2粒子含む。 φ14cm10YR5/3柱痕を有する。		30	19
24	1層-10YR2/3、φ3cm10YR8/6ロームブツ少含。		30	15
25	1層-10YR8/4ローム二次堆積。 2層-10YR3/1、φ1cm大バミス・10YR8/3ローム粒子少含。	土師器腰-2片	55	40
26	1層-10YR4/1、10YR8/4ローム粒子を含む。		30	32
27	1層-10YR4/1、10YR8/4ローム粒子を含む。		30	15
28	1層-10YR3/1、10YR8/4ローム粒子少含。		50	27
29	1層-10YR3/1、φ5mm石粒多含。	土師器腰-4片	30	23
30	1層-10YR3/1、φ2cm10YR7/6ロームブツ・砂粒を含む。		45	36
31	1層-10YR3/1、φ2cm10YR7/6ロームブツ・砂粒を含む。		50	42

第10表 Pit一覽表 No-2

No.	覆 土	出土遺物	長径	深度
32	1層-10YR3/2、10YR7/6ローム粒子・ $\phi$ 1cm <sup>+</sup> バミス少含。	土師器襖-1片	35cm	39cm
33	1層-10YR3/1、10YR7/6ローム粒子含む。		50	19
34	1層-10YR3/1、10YR5/6ローム粒子含む。Pit35を切る。		35	25
35	1層-10YR3/1、混入物無し。Pit34に切られる。		45	11
36	1層-10YR3/1、 $\phi$ 1.5cm <sup>+</sup> 石粒を含む。	土師器襖-1片	50	27
37	4層-10YR2/1、 $\phi$ 1cm <sup>+</sup> 10YR6/6ローム粒子少含。		50	25
38	1層-10YR2/1、 $\phi$ 1cm <sup>+</sup> 10YR6/6ローム粒子少含。		40	15
39	1層-10YR2/1、砂粒少含。	須恵器蓋-1片	50	31
40	1層-10YR4/1、 $\phi$ 1.5cm <sup>+</sup> 10YR8/4ロームブロック多含。		40	42
41	1層-10YR4/1、混入物無し。		40	13
42	1層-10YR4/1、混入物無し。		25	9
43	1層-10YR4/2、10YR8/4ローム粒子・砂粒を含む。		50	23
44	1層-10YR3/1、10YR8/4ローム粒子を含む。		35	22
45	1層-10YR3/2、10YR8/6ローム粒子多含・10YR2/1粒子含む。		75	49
46	1層-10YR4/2、 $\phi$ 1cm <sup>+</sup> 10YR8/6ロームブロック少含。	土師器襖-3片 坪-1片	75	16
47	1層-10YR2/1、10YR8/4ローム粒子・砂粒を含む。H1に切られる。	土師器襖-1片	50	23
48	1層-10YR4/3、 $\phi$ 1cm <sup>+</sup> 10YR8/4ロームブロック・ $\phi$ 3cm <sup>+</sup> 10YR3/1ブロック $\phi$ 1cm <sup>+</sup> 石粒多含。	須恵器蓋-1片	70	27
49	1層-10YR5/3、10YR8/4ローム粒子・ $\phi$ 5mm <sup>+</sup> バミス多含。M1に切られる。		75	33
50	1層-10YR4/3、 $\phi$ 1cm <sup>+</sup> 10YR8/6ローム粒子・ $\phi$ 5cm <sup>+</sup> 10YR2/1ブロック $\phi$ 1cm <sup>+</sup> バミス多含。		60	44
51	1層-10YR4/3、10YR8/6ローム粒子・砂粒を含む。		55	28
52	1層-10YR4/2、 $\phi$ 2cm <sup>+</sup> 10YR8/6ローム粒子少含・ $\phi$ 1cm <sup>+</sup> バミスを含む。 $\phi$ 16cm <sup>+</sup> 10YR3/1柱穴を有する。		45	40
53	1層-10YR6/4、10YR7/6ローム粒子・多含。 2層-10YR3/1、10YR7/6ローム粒子少含・ $\phi$ 1cm <sup>+</sup> バミス少含。		55	61
54	1層-10YR4/1、10YR8/4ローム粒子・砂粒少含。		55	19



## 第IV層 調査まとめ

### 第1節 土器について

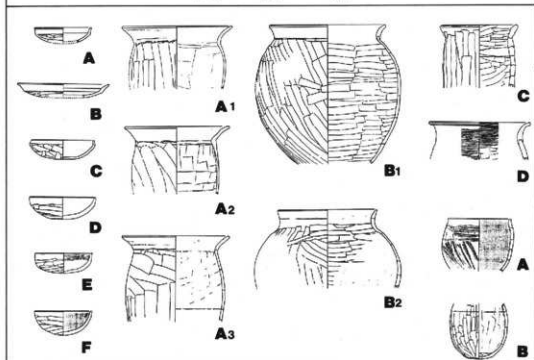
今回の調査で出土した土器の90%は住居址から出土したものであった。土器が残されていないH7・8号住居址を除く7棟の内、明らかに時期が異なるH2号住居址以外のH1・3・4・5・6・9号住居址はほぼ同時期の所産と考えられる内容である。ここでは佐久地方の奈良・平安時代の土器編年として高い評価を受けている「堤陸」の一連の業績を基に上記住居址出土土器の位置付けを試み、各住居址に年代を与える根拠とした。

まず、前述したほぼ同時期と考えられる6棟の住居址出土土器を器種毎に分類し「前田遺跡」で場が行った分類との比較を行う。その後、当遺跡出土土器の住居址毎の器種構成を「前田遺跡」の時期区分の中に位置付けてみたい。

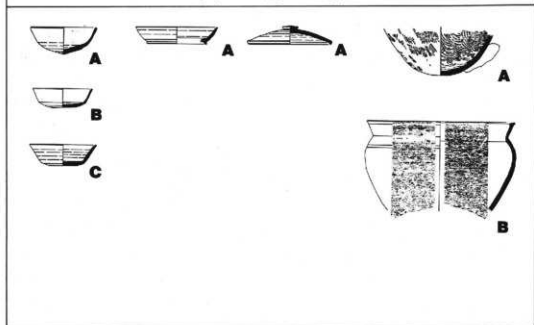
第35図に示したように、当遺跡出土土器の内ほぼ同時期として捉えられると考えられる6棟の住居址出土土器は土師器環-6形態、甕-4形態7類型、鉢-2形態、須恵器環-3形態、有台環-1形態、坏蓋-1形態、甕-2形態に分類される。これらを「前田遺跡」の分類に比定すると当遺跡の土師器環A・B・Fは該当するものはなく、C・D・Eは「前田遺跡」のAにほぼ該当する。土師器甕は当遺跡のA1～A3が「前田遺跡」のB1に、CがAにそれぞれ該当するものの、B1・B2・Dは該当しない。土師器鉢・須恵器甕については「前田遺跡」で分類されていないため比定不可能である。須恵器環については、当遺跡のAが「前田遺跡」のA1に、B・CがA2に、有台環AはCに、坏蓋AはC2にそれぞれ該当するものとして捉えられる。

それでは、当遺跡出土土器と「前田遺跡」出土土器の分類比較の中で双方に該当しなかった器種・形態の土器の位置付けについてはどのように捉えればよいのであろうか。まず、土師器環A・Bは前時代の様相を引きずるものとして捉えることができる。また、土師器環Fについては、法量・調整等において若干の相異はあるものの、「前田遺跡」の端に相当するものであろう。土師器甕B1・B2については成形・調整・胎土はA1～A3の所謂「武蔵型の甕」に近似しており、異なるのはプロポーショナルだけである。このような甕は佐久市分の「前田遺跡」や群馬県に類例が認められ決してアクシデント的な在り方をする土器ではない。その生成過程をここで論ずるのは早計であろうが、おそらくは当遺跡分類土師器甕Dのような、前時代の球胴を呈しへら磨きが施される甕の調整が、所謂「武蔵型の甕」のへら削り調整を受容した結果誕生したものと思われる。次に土師器鉢A・Bについてであるが、小型甕の代用としての性格を有する器種ではあろうが「前田遺跡」に認められる小型甕とは明らかに異なる系譜の土器である。前時代の系譜を引き

# 土 師 器

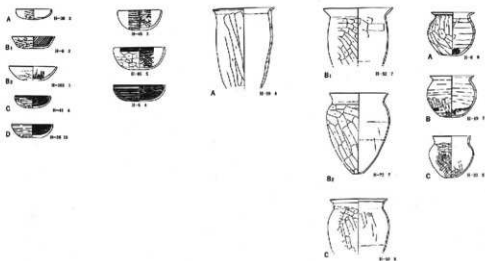


# 須 恵 器

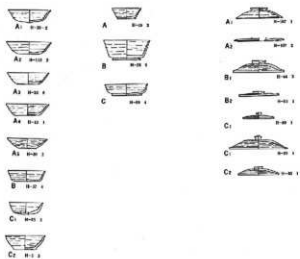


第35圖 型原遺跡II出土土器分類表

# 土 師 器



# 須 恵 器



第36図 前田遺跡土器分類表

ずるものとして捉えられよう。須恵器に関しては当遺跡に認められる器種は概ね「前田遺跡」分類で一括されており問題は認められないが、「前田遺跡」分類の有台坏A、坏A1～A2・B1～B2・C1は当遺跡では認められない。しかし、このことは「前田遺跡」に比べ当遺跡における須恵器の出土量の少なさに起因した結果と思われる。言うなれば遺跡の性格による違いであろう。

以上のような器種により構成される土器様相は「前田遺跡」第IV期に位置付けられ、8世紀の第I四半期を中心とする実年代が想定されている。その結果、当遺跡で検出されたH1・3・4・5・6・9号住居址は時間差を内包するものの概ね「前田遺跡」第IV期の所産として位置付けられる。尚、1棟のみ時期が異なるH2号住居址の所産期については9世紀代と言う大枠で捉えておきたい。

## 第2節 住居址構造について

土器様相と同様に、住居址構造とその時期別変遷過程についても「前田遺跡」において「堤隆」による詳細な分析が試みられている。ここでは、土器様相によって導き出された年代に従いH1・3・4・5・6・9号住居址の構造について「前田遺跡」との比較を試みたい。

カマドは完掘されたもの全てが北壁中央部に構築されており共通している。規模は「前田遺跡」分類に従うと7～12㎡の小形とされるものが1棟(H3)、14～20㎡の中形のもが1棟(H6)、24～29㎡の大形のもが2棟(H1・4)、40.6㎡を測る大形のもが1棟(H5)認められ、数量的な問題もあり単純な比較はできないが、相対的に当遺跡の方が大規模な住居址が多く認められる。主柱穴の在り方は、「前田遺跡」で指摘されているように当遺跡の場合も小形のH3号住居址が有さない他は、完掘された4棟の中形～大形のもは全て4基認められる。次にカマドと相対する壁下に認められる「出入口」施設と考えられる小径のPitについてはH1号住居址1棟についてのみ認められている。また、壁溝についてはH1・4・5号住居址において確認されており、この3棟はいずれも大形であることから「前田遺跡」の見解に矛盾しない。

最後にカマド構築方法について触れておきたい。当遺跡の場合カマドは掘り方時に袖の付け根部分が壁から5cmほど削り残されており、床の版築に並行して主として粘土により袖が構築される。芯材として用いられる軽石は面取りされる場合もされない場合もあるが、どちらかと言えば粘土に混入させているものと、「前田遺跡」のように面取りを施した軽石を心材として組み上げて粘土で被覆するものの2種類が認められる。天井部については双方共に軽石を袖に渡して粘土で被覆している。「前田遺跡」とはやや異なる状況を呈している。尚、「前田遺跡」で言及されているカマド祭祀についてはカマドの崩壊が必ずしも人為的であると断定しがたい状況を呈するものが多く、カマドを縦断する住居址南北セクションの観察からは自然崩壊と考えられる例が多く、支脚も住居址内に残されている例が多い。

### 第3節 調査方法の反省と課題

今回の調査は、住居址覆土内の全ての遺物を水平・垂直座標に記録する事を基本として実施した。しかし、本文中に掲載した分布図を見てのとおり効果はあまり認められなかった。

その原因としては、住居址覆土内に包含されていた遺物量が極めて少量であったこと、残されていた遺物の大半が廃棄された様相を呈しており原形・元位置が復元出来ないものであることの2点が推測される。

当遺跡が存在する田切台地は比較的平坦であり、その地形の特殊性から自然の力による遺構内への遺物の混入は遺構の深度が深いことと相俟って、覆土の下層にはあまり影響を与えないようである。また、人為埋土的なロームと黒色系土が混在する土層が遺構覆土中に存在する場合も多く、1遺構の覆土が単純に自然堆積や人為埋土のみで構成されるのではなく両者の複合や、人為埋土の2次堆積といった生成過程の異なる土層により構成されている可能性が高いことも一因となっているようである。

今回の調査が実施された前年に行われた「上聖端遺跡」の調査では遺構の分層発掘を実施しており、その後調査が実施され現在も継続的に調査を実施している「梨原遺跡」も同様な調査方法を採用している。これらの遺跡は遺跡名こそ統一されていないが同一台地に存在する同一遺跡であり、調査に関する遺跡の条件はほぼ同様である。筆者も「梨原遺跡」の調査に参加し上記のような調査方法により調査を実施したが、この台地上の調査はこのような方法により実施したほうがより効果的であり、遺物と遺構の共存関係をより具体的に捉えられるように思われる。

発掘調査における方法が、対象となる遺跡の状態・性格や、目的により選択され最も効果的な記録化が、よりシンプルな操作で達成できる方法の模索は絶えず試みられなければならないように思われる。

引用・参考文献

- 1987 前田遺跡  
御代田町教育委員会  
長野県考古学会
- 1987 長野県考古学会誌 55・56号  
長野県考古学会
- 1988 十二遺跡  
御代田町教育委員会
- 1988 蘇沢・葛石  
佐久埋蔵文化財調査センター
- 1988 長野県史考資料編 遺構・遺物  
長野県史刊行会
- 1989 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3  
日本道路公団名古屋建設局  
一塩尻市内その2ー 吉田川西遺跡  
長野県教育委員会  
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 1989 根岸遺跡  
御代田町教育委員会
- 1989 宮の上II  
佐久埋蔵文化財調査センター
- 1990 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4  
日本道路公団名古屋建設局  
一松本市内その1ー 総論編  
長野県教育委員会  
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 1990 聖原遺跡I 発掘調査概報  
佐久埋蔵文化財調査センター
- 1990 聖原II遺跡  
御代田町教育委員会



聖原遺跡Ⅱ全景（株式会社共同測量社撮影）



H 1 号住居址



H 1 号住居址カマド





H 2 号住居址



H 9 号住居址



H 3 号住居址



H 3 号住居址カマド



H 3号住居址カマド脇埋設土器



H 4号住居址



H 5号住居址



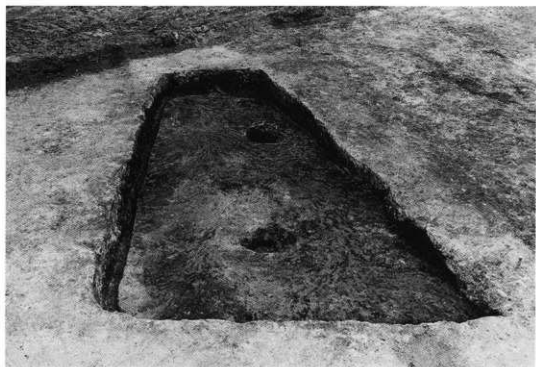
H 5号住居址カマド



H 6号住居址·M 1号沟址



H 7号住居址



H 8 号住居址



F 1 号堀立柱建物址



M2号溝址

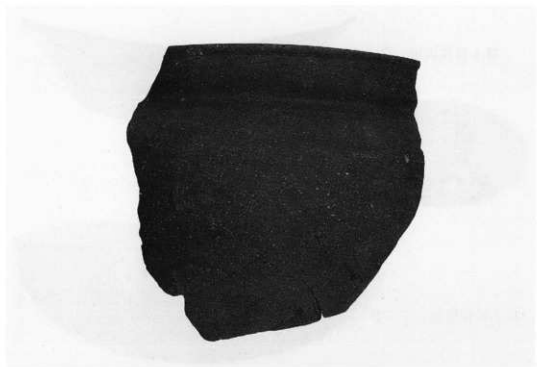


H 1 号住居址 7-9



H 1 号住居址 7-11





H 1 号住居址 7-13



H 1 号住居址 7-12

H 1号住居址 7-6



H 5号住居址 20-3

H 1号住居址 7-2



H 2号住居址 10-1

H 2号住居址 10-8



H 2号住居址 10-9



H 9号住居址 10-15

H 9号住居址 10-14



H 2号住居址 10-16

H 2号住居址 10-17



H 3 号住居址 13-3



H 3 号住居址 13-4



H 3 号住居址 13-1



H 3 号住居址 13-7·8



H 3 号住居址 13-2

H 3 号住居址出土種子



H 3 号住居址 13-9



H 3 号住居址 13-6



H 5 号住居址 20-4



H 6 号住居址 23-1



H 5 号住居址 20-5



H 6 号住居址 23-2



H 5 号住居址 20-12



H 5 号住居址 20-13



H 6 号住居址 23-3



H 4 号住居址 16-10



H 8 号住居址出土石器



墨書土器 (10-4 7-3 10-5 10-6)



M 1 号溝址出土石器

佐久市埋蔵文化財調査報告書第1集	〔金井城跡〕
佐久市埋蔵文化財調査報告書第2集	〔市内遺跡発掘調査報告書1990〕
佐久市埋蔵文化財調査報告書第3集	〔石階塚址群Ⅲ〕
佐久市埋蔵文化財調査報告書第4集	〔大ふけ遺跡〕
佐久市埋蔵文化財調査報告書第5集	〔立科F遺跡〕
佐久市埋蔵文化財調査報告書第6集	〔上曾根遺跡〕
佐久市埋蔵文化財調査報告書第7集	〔三貫畑遺跡〕
佐久市埋蔵文化財調査報告書第8集	〔瀧の下遺跡〕
佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集	〔国道141号線関係遺跡〕

---

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第10集

聖原遺跡Ⅱ

—長野県佐久市長土呂聖原遺跡Ⅱ発掘調査報告書—

1991年3月31日

編集・発行

佐久市教育委員会

佐久埋蔵文化財調査センター

〒385長野県佐久市大字志賀5953

☎0267-68-7321

印刷

佐久印刷所

---